

# 戦友会報

平成13年5月1日号

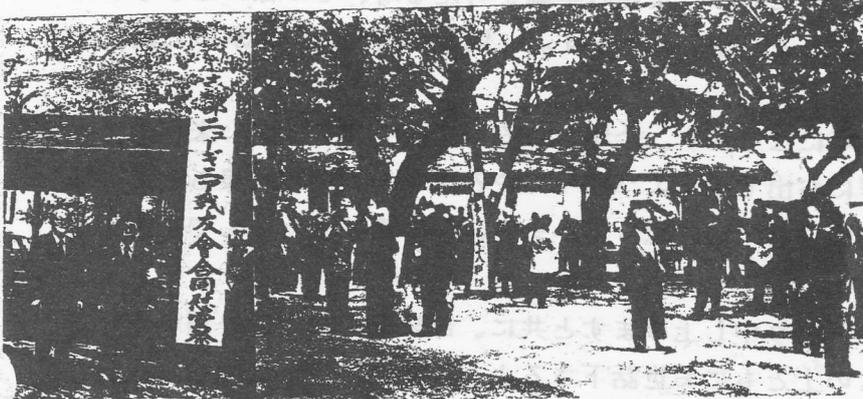
東部ニューギニア戦友会 事務局

157-0073-世田谷区 祐 6-32-5

TEL、FAX-03-3416-6504

振替口座、00160-0-75143

編集 発行人 後藤友作



早朝の受付風景

4月5日桜花爛漫と咲き乱れる靖国神社において  
東部ニューギニア戦友会主催第13回合同慰霊祭が執り行われた。  
(合同慰霊祭は昭和43年～平成7年＝4年目毎。平成9年より隔年実施)

## ご挨拶

東部ニューギニア戦友会々長 堀江正夫

このところずっと、政治、経済、社会、外交等あらゆる面で暗い話が続いて、鬱屈感も昂じ、覇気も自信も希望も無くしてきたのが、残念ながら紛れもない最近の日本の実態であり、国民の真情であります。

こうした中で最近 中、韓、両国の非常識極まりない圧力に屈する事なく、新しい教科書を作る会のメンバーが執筆した、中学校の歴史教科書が検定に合格したことは、せめてもの救いであり喜びであり、ホッとされた方も多ことごとく同慶に堪えません。

加えて昨4月16日には、大朗報が飛こんできました。

雅子皇太子妃の、ご懐妊の報道です。いうまでもなく多くの国民は皇室に男系の皇嗣ないことを、ひそかにご案じ申し上げておりました。その中でこの朗報ですから喜びも一入です。この上はどうかお元気で目出度く皇子がご誕生されるよう、心からご期待申し上げお祈り申し上げたいと思います。

さて、昨年は多事多難だった二十世紀最後の年でありました。戦友会としても、この意義ある年に東部ニューギニア慰霊巡拝をと計画し、多くの戦友やご遺族の皆様に、現地でご供養して頂きました。私も19名のご遺族を主とした一行で参り23か所でご供養することができ、感謝の気持ちで一杯であります。

昨年より今年にわたり、政府の遺骨収集が2回行われ、169柱の亡き戦友のご遺骨を祖国にお迎え致しました。ご協力頂いた戦友やご遺族や青年遺骨収集団の皆様に、心から感謝申し上げたいと思います。

この4月5日には、隔年実施している東部ニューギニア戦友会の、陸海軍合同の慰霊祭を実施致しました。桜花爛漫たる靖国神社には全国各地から予想を上回る300名を超す戦友やご遺族にお集まり頂き、亡きお英霊に弔魂の誠を捧げました。

本年は新しい試みとしてお遺族有志の代表の祭文奏上も行いましたが、さ来年の慰霊祭では、ご遺族の皆様にも準備などのお手伝いを頂き、その次の回からは実質的にご遺族の皆様主体で執行して頂けるようにしたい。戦友達の年齢を考えると、その様にしなければ慰霊祭そのものが実行できなくなると心配しています。関係の皆様方の格別のご高配を心からお願い申し上げます。

本年は、大東亜戦争勃発60年になります、今年もなるべく多くの皆様が、未だ大半のご遺骨が眠る、現地の慰霊巡拝にお出で頂くようお願いしてやみません。遺骨収集も更に実施して貰うよう、今後も政府にお願いしたいと思っています、その節はまた進んでご協力をお願い申し上げます。

最後に皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げますと共に、部隊会のお世話を頂いている皆様に心から感謝申し上げ、この上ともにお世話下さるようお願い申し上げます。

特に、戦友会の後藤事務局長には、長年に亘り万端のお世話を頂き、その献身奉仕には感謝の言葉ありません。東部ニューギニア戦友会が今日まで存続し、諸々の活動を行うことが出来るのは、言う迄もなく、一にも二にも後藤氏のお陰であり、この際皆様と共に心から感謝申し上げ、この上とものご健勝をお祈りしたいと存じます。

では皆様、また元気で会いましょう。(4月17日記)

天正 過分なお褒めの言葉を頂き有り難うございます。慰霊事業を続ける戦友会のために奉仕できる身の幸せを感謝しながら終生したいと思います。 後藤。

## 合同慰霊祭 祭 文

東部ニューギニア戦友会 代表

本日、桜花咲き匂うここ靖国神社の社頭に、全国から東部ニューギニア戦友会々員とその遺族が相集い、第十三回東部ニューギニア陸海軍合同慰霊祭を行うに当り、東部ニューギニアの戦場で、尊い一命を祖国に捧げられました十三万の御英霊の大前に、戦友会 全会員を代表して、謹んで申し上げます。

あの当時から既に半世紀を過ぎ本年は大東亜戦争開戦六十周年に当り、いよいよ二十一世紀を迎えました。

今こうして静かに御霊の前に額づきますと、あの当時のことが髣髴として脳裡に浮び、新たな感慨と深い悲しみが湧いてくるのを押さえることができません。

思えば東部ニューギニアの戦いは、満三年間の長期に及ぶ、瘴藨未開の長遠二千数百軒の地域で、圧倒的な戦力を敵の主攻正面での、終始食も弾丸も欠く、しかも休む間もない連続不断の、人類がかって経験したことのない、凡そ人として絶えうる限度を遥かに超えた壮絶無比の戦いでありました。

この空前絶後の戦いの中で勇戦敢斗遂に祖国に殉じられた戦友が、参戦した十五万名中実に十三万名の多きに及んだことを思う時、悲痛まことにいうべき言葉ありませんが、その忠烈は必ずやただに日本人だけでなく、広く全世界の人々の心の中に永久に留どまりそして、その歴史の上に輝き続けることを信じて疑いません。

それにつけても、皆様を始め明治維新以来の全ての殉国の御英霊をお祀りする、国としても国の慰霊の中心的施設であると言っている、この靖国神社が、戦後今日まで国家護持どころか、こともあろうに昭和61年以降は、中国の故なき干渉に屈し総理の公式参拝が中断して既に十数年に及び、したがって天皇陛下も久しく御親拝をお差し控え遊ばされていることは、誠に恐懼の至りであり、真に無念痛憤の極みであり、申し訳なさにお詫びの言葉もありません。

もとよりこのような状況をその俣放置することは、尊い一命を祖国に捧げられた皆様の崇高な精神を冒瀆するものであり、それはとりもなおさず、亡国への道を進むことであり、断じて容認することは出来ません。

私達は、一国民特に生き残って今日に至っている皆様の戦友として、このような政治政府の態度に強く抗議し、一日も早い匡正のために、此上とも全力を尽くす覚悟であります。

昨年は二十一世紀最後の年であり、私達幾組もの慰霊団が東部ニューギニアの各地に参り、巡拝供養を行わせて頂きました。また政府も東部ニューギニア地区の遺骨収集を十二年度は二回行い、幸いにも169柱のご遺骨を故国にお迎えすることができましたが、この遺骨収集には、ご遺族と共に七名の戦友も参加協力させて頂きました。

申すまでもなく私達は、これからも身体と健康の許す限り、隔年のこの合同慰霊祭はもとより、現地での慰霊巡拝と政府の遺骨収集協力を続ける覚悟であり、更なる遺骨収集の実施についても、政府に強く要請しているところであります。在天の英霊、何卒私たちの微意をお汲みとり頂き、安らかに神鎮まりまして、この上とも祖国の平和と繁栄と、御遺族の上に御加護を垂れ賜ますことを。

平成十三年四月五日 東部ニューギニア戦友会々長 堀江正夫

## 合同慰霊祭 祭 文

東部ニューギニア遺族代表

本日、桜の花咲き誇る靖国神社に、東部ニューギニア戦友会員及び遺族が共に集まり、合同慰霊祭を行うに際しまして、東部ニューギニアの戦場に散華されました御英霊のおん前に遺族を代表し心より哀悼の意を表します。

時の流れは早いもので戦後すでに55年が過ぎました。

皆様方は祖国から南へ約5千キロ余り離れたニューギニア戦の過酷な状況下でも、故郷に残した妻や子 兄弟 家族のことなど、連日のように夢見たことであらうでしょう。

その間、私達残されたものも日々の暮らしの中におきましても、皆様方のことを一日とて忘れたことはありませんでした。

私事ではありますが、私と父が別れたのは4歳9か月、妹が生後9か月、昭和18年2月真冬の寒い日で私は厚地のオーバーを着ていました。三重県津の聯隊で、大勢の人の中に歩いて行く父の姿を見送ったのが最後でした。

赤紙招集により戦地へ赴いた父の便りには『自分は元気で軍務に励んでいるので安心する様に、子供達には充分注意し元気な子に育ててほしい』また『子供達の写真は大事に肌身離さず持っている、日本へ帰る時は御土産を沢山持って帰るので、楽しみに待っていて欲しい』と綴られており、最後に母の許へ届いたのは昭和19年4月でした、戦地からの便りは現在、私がお守りとして常に持ち歩いております。

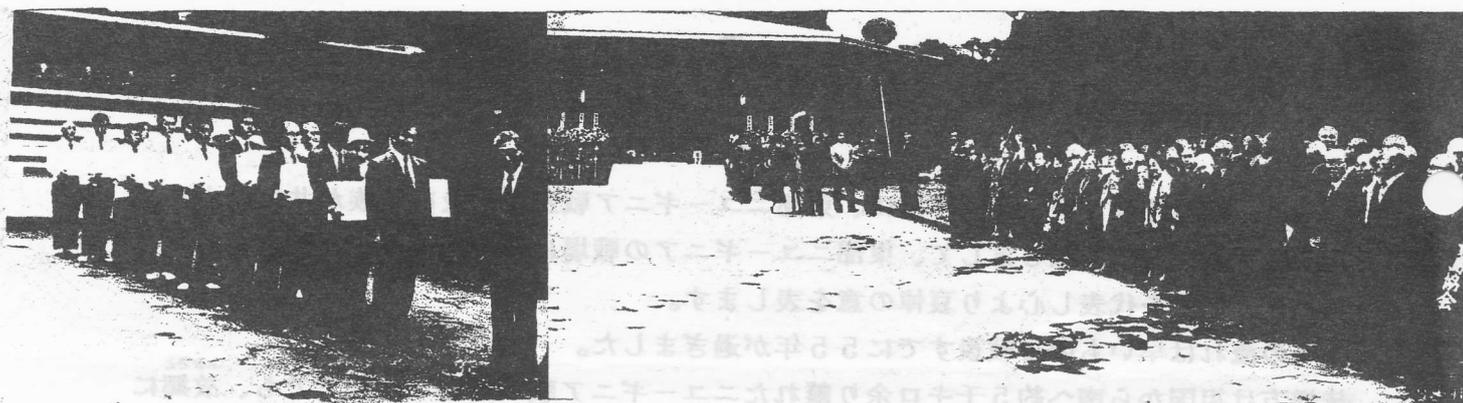
昭和20年8月15日終戦となりました、そして日本は皆様の尊い命の犠牲により混乱と廃墟の中から立派に立ち上がり、国際社会の中で大いに活躍しております。

終戦後暫くの間遺族にとりましては、辛く悲しい現実に向き合いましたが母親達は遅く立直り、家庭をしっかりと守り子供達を立派に育て上げました、子供達は父のいない寂しさ貧しさに耐え、くじけず頑張りました。しかし就職の際『両親健在』という条件付きの会社にはどれほど口惜しい思いと社会の矛盾に愕然とした事でしょう、でもご安心下さい私達遺族は幾多の荒波を乗り越え現在平和と繁栄の社会の中で平穩に生活しております。

そして、平和を守り戦争の悲惨さ、戦争の愚かさを子々孫々にまで語り継ぎ訴え続ける事こそ、皆様方の御霊<sup>みたま</sup>にお応えする義務と考えております。

本日ここに東部ニューギニア戦友会の慰霊祭が厳かに行われ、南溟の地に果られた13万御英霊が安らかにお眠り下さいます事を、多くの遺族を代表して心から願うと共に皆様方の御霊<sup>みたま</sup>が日本の将来と残された私達遺族の上に、より一層の平和と御加護をお授け下さいますように。 平成13年4月5日 東部ニューギニア遺族代表 巽 恵子

平成十二年度 東部ニューギニア地区で遺骨収集事業(第15次、第16次)が実施されました。



ニューギニアより戦友の英霊帰る 千鳥ガ淵戦没者墓苑でお迎えした。

#### 東部ニューギニア戦友会の遺骨収集について

厚生省社会援護局よりの依頼により、東部ニューギニア戦友会では、平成12年度に行われたニューギニア地域の遺骨収集事業(第1次-平成12年10月31日~11月17日 5名)(第2次-平成13年1月21日~2月5日 2名)の収集協力団員を派遣致しましたが、その後の行動概要と成果は次の通りであります。

第1次収骨派遣団。	厚生省職員	神山正団長	外3名	
	ニューギニア戦友会			5名
	日本遺族会			4名
	学生収骨協			3名
				<u>計16名</u>

戦友派遣団員(以下敬称略)

収骨地区と収集遺骨数

1班-今西 貞茂	山崎 幸温	ブナ-6。サナンダ-41。	47柱
2班-岩谷 寿春		ウエワク。ブツブツ。テレブ。オクナル。ボイキン。ムンガ。	25柱
3班-棚橋 幸二	宇佐美 晃	セバ。ウリンガン。鶏川。マルツツ。ウオムサク。その他。	17柱
			<u>計89柱</u>

行動概況(一部省略要記載)

- ★11月1日-14時30分、ニューギニア大使館に全員表敬訪問と打合せに行く。田中大使より労いの言葉を頂く。なお治安は良好であるが一人歩きはしないように、との注意を頂く。
- ★11月2日-国立博物館へ表敬訪問し、行動する収骨団の警護、通訳などの依頼打合せす。但し、事務所が狭いので厚生省職員だけで、我々は博物館内の見学であった。館外に出て、ウエワク地区 カリア より遺骨1体が持参され、2班がこれを受領した

各班の行動日誌から抜粋

第1次1班 戦友団員 今西貞茂。 山崎幸温。

- ★11月3日-一班の全員元気で モルビー-出発、スタンレー 方面は雲、機は高度を上げて雲上に出る、前回のようにはコプター ではないので目指す ガ。イキ。などの飛行場は見当たらず、緑ゾナが飛行場に無事到着、アイランド、トラベル、ロッツに旅装を解く。昵懇の アンボ 夫妻の訪問を受けて感激一入ならず土産物を渡す、長い航空機の疲れが一気に出る。

- ★11月4日-ブナ地区、当時の戦闘経過を思い起して感無量-。現知人は、遺骨の埋葬地は此処だ、と言うが同行の安原と言う人物が以前単独で来たとき、部落に対して学校と教会の建設を約束した、それが出来なければ発掘させない。と言うことになって発掘不能になってしまった。

(安原宏和とは戦友でもなく遺族でもない。平成9年に日本遺骨収集団代表と自称して募金強要した人物。どうして収集団員として同行しているのか判らない)

私は安原に対して「そんな約束を何故したのか、そんな事を一個人が勝手に約束するから収骨事業が困難になるんだ」と。またロッツに帰り着く時、残置してある自分の車の所に行きたいと言うので「公的な収骨派遣団員であるからには、そんな個人的行動は許されないことである」と注意すると、俺は団体行動から脱退するなど、捨台詞をいう  
我々戦友の遺骨に対し、不都合なことがあったら吾々戦友が許さん、と云っておいた。

- ◎-東部 ニューギニア では近年遺骨収集が ビジネス として成立してしまっているように自分には受け取れた。庭先から遺骨が出れば、住民は宝物のように部屋の隅にしまっておき、日本人が来たら高額な金で売り付ける、そして、その遺骨を買ってしまう一部の日本人のバカな行為。そのような行動をとる人がいる為に、年々遺骨収集が難しくなっている

と断言できよう。『収集作業場が人骨市場になってしまった、戦友に申し訳ない』と嘆息していた。かつての戦友の方の悔し涙が自分たち青年にも伝播した。

—青年収骨協力団発行【遺烈】 會田雄一郎(猷暁)。

★11月5日 —ナに向かった。飛行場跡を通った時には当時の戦場を想起して感無量であった、部落の有志達が集まる、遺骨はないが遺品はある、しかし既に個人の所有物になっていて金を払わなければ写真さえ撮れない状態である。

★11月6日 —車で サナグ に向かう、1時間ほどで到着、此処でも遺骨は個人で持っている、話し合いのうえ返事するとのことであった。住民から無償提供させるのは困難である。また、その様にさせた心ない人達の(類のよう)行為は全く情けない。

★11月8日 —サナグ、ナ、ナ 方面の情報待ち。午後1時頃、ナ 方面に行く案内人は ナ 氏。  
ババ橋左岸地区に遺骨らしいものがある、との情報で ナ に入る約30分、雨が  
紛紛降る中に馬の骨らしい物、鉄蹄らしい物 2~3個発見したが遺骨は見当たらず。  
ババ橋、当時は鞍鉄索を張り舟艇で渡ったらしいが私達先遣隊(144聯隊1大隊、  
横山工兵聯隊の1部)は現、橋梁の100M程の下流を渡渉していたが、撤退に際し敵  
の及追が激しく、友軍が未だ敵中にあるのに鉄索を切断したとのこと。敵の追撃を受  
けながら、雨季で増水していた ナ 河の渡河は不可能で、部隊が馬を引き左岸の渡  
河点を探しながら、ナ で最期を遂げた地点であろうと思われ、無量の感一入で  
あり心から冥福を祈るばかりであった。

★11月9日 — ナ 地区で5柱。サナグ 地区で個人所有の1柱を引取り雨の中を ナ に帰る。

★11月10日—サナグ の住民14、5名が遺骨を持参す、中庭に拵げた遺骨を前にして、神山団長、  
倉田通訳、ナ 氏、国立博物館の職員、住民代表達で、遺骨引取りのことで長時間の  
交渉になる。

話し合いの内容は不明であったが、交渉の結果2回に分けて47柱の遺骨が引き渡  
された。歯の形の整っているもの、頭骸骨に貫通痕のあるもの等あって、ナ 激戦  
の生々しさを思い起こし、これが、かつて共に戦った戦友の変わり果てた姿か、と、  
思うと泣けて泣けて仕方がなかった。

◎—庭先いっぱい広げられた遺骨を彼等は買い取れという。「まるで人骨市場や」、  
「わしはもう対面できただけでええ」と老兵達は涙を流しながら云われ、金を出し  
買い取ることを拒否し、戦死された方々への敬意を示していた。自分はそのような  
姿を見て、もし叶うならこの様な誇り高い方々の為に、今後もお役に立ちたいと  
心底思い、涙が止まらなかった。

青年収骨協力団発行【遺烈】 西山和彦(猷暁)

- ★11月4日 - ガエン 地区に到着、フツ 集落の庭に7柱の遺骨が並べられて埋葬されていた。砂地のため割合掘りやすい、雇用した部落民達に「掘って遺骨を発見したらそのままに」して置くように指示して、更に16キロほど先の ロクまで情報収集にいったが、確かな情報が得られず フツ に戻る。フツ 部落では遺骨を発掘されてあったので、同行の博物館員(ニューギニア政府職員)が確認し収容した。
- ★11月5日 - 6日、再々度 ロク 部落を調査訪問したが、情報が乱れて遺骨の所在が確認できず帰路、フツ 部落に立ち寄り収骨後に埋め戻した跡に、現地の苗木を植え香を焚き黙祷捧げ住民たちに深謝して帰った。
- ★11月9日 - ウエワより テケ 岬へ、海岸に打ち寄せられていたという 遺骨1柱。現地人より受領して ネケン へ急行する。  
通称 クマ さんの案内で兵站病院跡地に向う(昭和19年前半は90兵站病院、後半は112兵站病院所在、3800余の戦没、戦後4回の収骨数2000余の遺骨あり)。ネケン 部落の ピーター 氏が多くの住民と駆付けて案内してくれる。川をさかのぼり ジャングル の入り口付近で、流れ寄り一塊になっていた 8体 の遺骨を収集明日の収集に期待して帰る。
- ★11月10日 - 雇用した現地人に本日の作業手順を説明し発掘を始める。三年前に来た時より水流により地形が変化している少し流されていた処を試掘したところ遺骨が出てきた。この遺骨は日本に持ち帰るべき、と私が主張したが厚生省の指示であると通訳と口論になったが、ここは特定地区として早い後日に再収集するとのことである。戦友よ、それまで待ってくれ、と涙を流して祈るのみであった。遺骨を埋め戻し赤布を目印に表示し一日も早い収骨願いながら溝に留まっていた4柱の遺骨のみ収容し持ち帰った。
- ★11月12日 - ネケン 川西方 100M 44年48年時の、戦友収骨団員と37PS岡谷治遺族が慰霊塔を建立してあり、その墓守している クナ 一族より遺骨1体を受領し十国峠に向かう。クナ 集落を過ぎ カラン 部落で1体を受取る。この遺骨は2度 ウエワ、ネケン に持参し、1000村を要求したので川端氏が拒否していたものという。今回は博物館員や警官も同行したので、50村で話が纏まり引取ることができた。帰路 カワ 部落で(故三橋遺骨の件)を精査したが不明であった。
- ◆◆◆近時、遺骨収集を逸る余り「日本兵の遺骨を持参した者には、日本政府より相応の金を支払うであろう」というパンフレットを配布したり、旧軍の犯した悪行?謝罪のためと称して金品を、バラまいている心ない日本人がいる。  
原始生活から貨幣経済社会へ、と、急速に転移したニューギニアの現在社会には、あの素朴で純正な心意気で日本軍の窮状を感じとり、援助協力してくれた昔の人は亡くなったし、あの思想も伝承されている所が少ないようである。

現地人、特に若者の多くが仕事も定取もないために、金儲のためには手段を選ばずで、(日本も餓の噂とも云ないが)。また情報量が少ない土地柄のため「2~3の近隣社会主義国がやっているように、金持ち日本に難癖をつけて強要すれば金とれる」と、云うことが広範囲に喧伝されており、現地人自身が先祖の骨、動物の骨などまで金に換えようとして持込む者もいるという。正規の遺骨収集を阻害していること甚だしい。 18-A 後藤友作<sup>ごとうゆうさく</sup>

第1次 3班 棚橋 幸二。 宇佐美 晃。

★11月4日—収骨団員5名、博物館員1名、通訳1名、警官2名、途中よりワット部落を知る青年1名が加わり マカム川沿いの ハウエイに行く、Y路から右へ支流 和川底道に行くこと30分、川底を離れて急坂になる。悪路のため スリッパ 後押しの繰り返しで走行中止になる。道案内の青年の言によれば、部落まで山道を徒歩で2時間、遺骨を保管してあるリストハウスまで2時間、更に飛行機の残骸のある所まで2時間かかると言う事なので引返す事にする。博物館員より ワット村長宛に、明後日 6日 9時にY路の小学校まで、遺骨を持参するよう依頼の書状を案内の青年に託して帰宿。

★11月5日—江高校留学生の情報でサワワット中腹 サンテ付 へ、墜落日本機の遺骨収集に行く。ワットの関係で 13 時20分 へリ、ワット。目的地 サンテ付 到着。部落長夫人(田橋巖)の言、「飛行士の遺骨は リスト の神と日本の神の合同でお祈りして埋葬してある、神父さんの許可がないと渡せない」とのことで引取りできず。村人 サワワが飛行機の尾翼下の部品、機体番号 461を持参した彼の話に依れば此の南方二つ目の尾根付近に日本機が墜落、本体は バラバラ になり斜面に四散した由。部落民がバラバラの機体を集め、その付近に へリ の着陸場所を伐開してあるという、遺骨の引取り不可能なため墜落機確認と慰霊のため へリ で伐開場所に行く。機の残骸は南斜面 80M位下った処に積み重ねてあった部品を調べたが陸海軍機、機種などは不明であった。今日も空振り。

★11月6日—墜落日本機パイロットの遺骨引取りに、和川下流 マカム小学校までゆく、約束の時間を大幅に遅れて青年来たるも遺骨は持参せず空振りに終わる。同行の博物館員 マク氏、強硬な手紙を持たせて帰す(青年の名 スル村 カス)。

★11月8日—マガン 最近の情報として、PNG人で政府または博物館員の偽せ肩書きを使い、日本兵の遺骨を集めている者有り、要注意とのこと。

マガン 方面に向かう。セバ 部落の住民が保管していた遺骨1体を受領。カワガ 部落の埋葬地という処を多人数で発掘作業したが、左腕骨のみの1体を収容したに過ぎなかった。

★11月10日—サキンは2班のテリトリー であるということで我々3班は サキン 以西 マルマツ方面の収骨作業を行うことになった。他方面は連日の雨で泥濘であったが、この地区は雨量が少なかったのか リネ、ソナム 河共に水量が少なく渡河できた。

今日の収骨は、カルク 1。ソギイ 2。アツ 1。サカ 1。計5柱の遺骨を収容す。

★11月11日—カリア、で出土したという1遺骨を受取り、降雨を警戒して焼骨作業する。

★11月12日—鶏川6。ウマサ 2。マルツブ 1。計9柱の遺骨を収容し焼骨を終了した。

★11月13日—改装なった ウエウ 慰霊墓苑に収集団全員集合、来賓として セビク 州知事、ほか  
ニューギニア政府職員10名、ウエウ 警察署長たちの参列を得て、追悼式を行ない  
今回収集した89柱の英霊を奉持して、全員無事に帰国しました。

◎—英霊 戦友会 遺族の方々、そして私の祖父の体験、苦しみや哀しみなど様々な想  
いの全てを、私達は共有することはできない。しかし、英霊の尊い命の犠牲を礎に終  
戦時の 如 という状況から、復員してきた方々の努力と遺族の哀しみや苦勞によって、  
今日が作られたという事実を私達は決して忘れてはならない。この事がすなわち英霊  
や先人に感謝し、大切に思うことが現在を生きる私達の努めである。

青年収骨協力団発行【遺烈】 池田祥子(勲四)

東部ニューギニア(ボイキン地区)平成12年度第2次遺骨収集事業報告(抜粋)

厚生省社会 援護局 神山団長以下	3名	
日本遺族会	4名	
東部ニューギニア戦友会	2名	
現地通訳	1名	計 10名

第2次収骨事業(ボイキン地区)収骨数 80柱

戦友派遣団員 園田 定(79歳) 梅 忠重(71)

★1月24日—神山団長ほか4名 ボイキン へ交渉に行く。午後より全員で仮発掘に行き、前回の  
赤テープ目当に徒歩45分到着。発掘し始めたところ地主が現れて「発掘は明日からの  
約束だから今日は掘るな」と言うので中止して帰ることにする。

★1月25日—ボイキン、イゴ村。全員整列して園田氏の音頭で『戦友の皆さんお迎えに来ました  
靖国神社にお供します出てきて下さーい』と大声で迎えにきたことを告げる。

現場は ボイキン 川を逆上った処が目的地、緩やかな凹凸のあり山裾の平坦地で ビンロ 樹  
や椰子の木が植林してある。遺骨を発掘した所は腰位の深さや、170CM以上掘下た  
処で、浅く掘った所での遺骨発見は無かった。今日の遺骨収容は17柱。

★1月26日—収骨現場の イゴ村は天気良好。万年筆、水筒、飯盒の蓋、貨幣などが多数出土  
したが氏名の手掛かりあるもの無し。本日の収骨数20柱。

★1月27日—前日に引続いて多数の雇用村人と共に今日も発掘に励む。収骨数16柱

★1月28日—本日は焼骨班(種、鬮、3氏)と収骨班に別れての作業になる。

焼骨班は スコール を危惧して収容済の53遺骨の焼骨。イゴ収骨班は前日 ウエウ 刑務所

より4名の脱走犯あり、とのことで警官6名の警護附であった。収骨数7柱

★1月29日 - ウェク方面よりの情報があつて収集員3名を派遣するも成果なし。

村、インゴ村での収骨数12柱であった。

★1月30日 - 午前中は収集作業で、収集遺骨数4柱

午後より発掘現場を埋め戻す復元作業、と言う事になり総員懸命の作業であったが、  
旧に復する筈もなく概略でOKであった。

★1月31日 - 村地区より4柱。遺骨の持参あつて引取る。 第二次収骨総計80柱。

現地官民の絶大な協力を得て収骨事業は、計画どおり作業日程を無事終了したことを  
喜ぶものでありますが、村の現地には未発見の遺骨が相当多く残置されあるもの  
と推測されますので、再々の収集事業実施をお願い申し上げる次第であります。

★2月1日 - ウェク慰霊墓苑において、神山収骨団長以下団員全員、田中大使、縦山書記官、  
PNG国会議長、ウェク州知事、臨席され現地住民も多数参列されて追悼式を  
行い、収集80柱の英霊を奉持して帰国の途についたのであります。

(紙数の関係上要点のみ抜粋して記載した)

◆◆◆ご高齢にも拘らず波頭万里、戦友が眠る現地に赴き大変なご苦勞をされてお帰りに  
なりましたことは、誠にご苦勞様でしたと、衷心より厚くお礼申し上げる次第であります。

私は、お帰りになられた時のお迎えも、九段会館での慰勞会にも出席しましたが昨年も、  
そして今年もご報告下さった団員の方が涙に濡れて何度か絶句なさいました。

その時、私の涙線も緩み熱い涙が浮んでいました。そして千鳥ガ淵墓苑でご遺骨をお迎  
えした時も同様でありました。

団員の皆様にはお疲れのところ、作業内容を切々と報告されながらの絶句、それは共に  
戦った戦友は既に亡く、幽冥を異にして語りかけてもその声は大空の彼方に消て届かず、  
作業の事などが走馬灯の様に脳裡に浮かんで、万感胸に迫ったことと推察致しました。

私の脳裡では、ご苦勞様でしたの声が早鐘のように高鳴っていました。そこで私は、  
このご苦勞をもっと詳しく知りたいと思い、事務局から皆さんの行動記録を借りて拝読し  
想像以上のご苦勞であったことが判り、改めて団員の皆様に感謝しました。

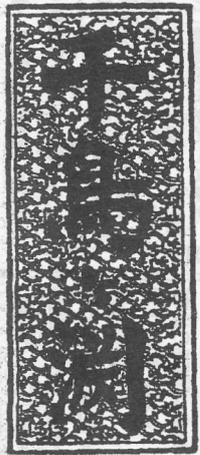
22飛大 諸田照吉

◆◆後記 - 祖国に殉じて戦い散り英霊になって鎮まる靖国神社。偏向思向者や一部の宗教  
団体、外国の思惑を気にする政治家達は靖国神社を避けている、首相が参拝すると何故  
軍国主義が復活するのか？。今年の慰霊祭には介護付添で車椅子の超高齢者も参列した。  
万葉の桜が散り始めていた。幽冥を異にしている戦友達に会に行きつづけるであろう。

12年度の遺骨収集事業報告と合同慰霊祭報告の記載を前後して仕舞いました。後藤。

★推薦図書 - ニューギニアの日本軍は悪徳者だったのか？ 『戦争、虚構と真実』 第1回大賞受賞作家 尾川正二(20歳)著

- 氣絶と戦火の中の若き軍医の戦い 『ニューギニア軍医戦記』 鈴木正己(軍司令部軍医)著。 光人社刊 全国書店 取次



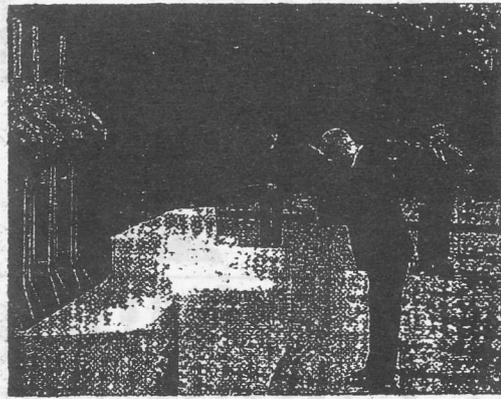
第411号

財団法人 千鳥ヶ淵 戦没者墓免奉仕会  
 〒102-0075 千代田区三番町2  
 電話 (3261) 6700  
 02-東京 00146-2-42556  
 振替口座 小田原 健児  
 発行人 高田耕治  
 定価 1部100円 (送料共)  
会費・寄附金には新聞代を含むものとす。

### 東部ニューギニアから ―遺骨の帰国―

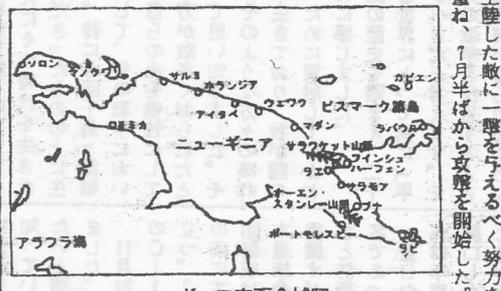
立春翌日の2月5日(月)午前、東部ニューギニアから遺骨収集団(団長 厚生労働省神山正氏)が帰国し、収集団から厚生労働省にご遺骨が引き渡された。今回の収集団は、1月21日から約2週間の収集作業を続け、80社の御遺骨を収集して帰国されたものである。

今回の遺骨収集は、厚生省が厚生労働省に変わって初めての御遺骨の帰国であったが、この引渡式には、新設の副大臣となった増田副大臣以下が出迎え、また、当日はしっかりと立春を迎えたばかりの冷たい風の中を、東京都道族会を初め東部ニューギニア戦友会関係者等が多数出迎えていた。



帰国されたご遺骨に献花する増田厚生労働副大臣

東部ニューギニアの戦い回響 昭和17年当時、東部ニューギニアでは、ポートモレスビー攻略を目指した南海支隊が、8月初めに進出していた。タンレー山系頂上付近まではオーエンスだが、ガダルカナル島の戦局急を告げ、ポートモレスビー攻略を中止して、同作戦に参加中の兵力の一部をガ島方面に転用することとなった。攻撃を中止した南海支隊はスタンレー山系の線を守備することになったが、補給がつかず山岳作戦に疲れ切った部隊は、敵の反攻に抗しきれずブナ地区海岸線まで後退のやむなきに至った。これらの部隊は11月末にはブナ地区に後退集結したが、最早戦う力はなかつた。一方マッカーサー軍は10月中旬ブナ東方百キロワニゲラに陸軍部隊を空輸しブナ攻め作戦を開始した。11月下旬から約一ヶ月間に亘り連合軍のブナ地区周辺への攻撃作戦は激しく展開された。ブナ地区では、昭和18年の正月を迎えて、残存兵力は陸海軍とも10名内外に激じていた。ブナ地区の陸、海軍指揮官、山本大佐、安田大佐は1月2日敵陣に突入して遂にブナ守備隊は玉砕した。ブナ西方のバザブア地区、ギルワ地区も同様の苦戦が続き、第18軍司令官は1月25日、この地区の部隊に後退を命じた。この撤退にあたり、南海支隊長小田少将はギルワにおいて自決し、部下英霊と共に同地に止まった。



ニューギニア方面全域図

ブナ地区の攻防が激しく続いていた頃、南東太平洋方面の戦局全般に対処するため第8方面軍と第18軍が新編された。東部ニューギニア方面は第18軍が担当することとなり、第18軍は1月26日統帥を発動した。その後連合軍は昭和18年6月にはサラモア方面に上陸を開始し、ラエ、サラモア地区の攻防が開始された。同地区にあった第51師団はこれを迎え、の海上移動に際し大きく傷ついていた。約2ヶ月の戦闘の後には後退のやむなきに至った。この後退は、道も無い標高4千mを越すサラワケット山系越えの苦しい後退となり、51師団を更に大きく消耗させることとなった。この後、連合軍は9月下旬にフィンシユハーフェン地区に上陸し攻撃を開始した。第18軍はこのことを予期し約4百km西方にあった第20師団を急遽同地区に向かわせていた。10月半ば漸く現地に到着した20師団兵は補給の続かない中、食糧は4分の1定量と言つような悪条件下で血みどろの戦闘をした。しかし昭和19年1月半ばには苦難の転進のやむなきに至った。この転進もまた険険フニステル山系超えの苦しい転進であった。歩兵79連隊は3月中旬頃ハンサに漸く辿り着いたが、その兵力は3百名余に減っていた。敵は更に昭和19年4月以降、アイタペ、ホーランサと相次いで上陸した。第18軍は残存兵力をもってアイタペに上陸した敵に撃つべく努力を重ね、7月半ばから攻撃を開始した。

26日統帥を発動した。その後連合軍は昭和18年6月にはサラモア方面に上陸を開始し、ラエ、サラモア地区の攻防が開始された。同地区にあった第51師団はこれを迎え、の海上移動に際し大きく傷ついていた。約2ヶ月の戦闘の後には後退のやむなきに至った。この後退は、道も無い標高4千mを越すサラワケット山系越えの苦しい後退となり、51師団を更に大きく消耗させることとなった。この後、連合軍は9月下旬にフィンシユハーフェン地区に上陸し攻撃を開始した。第18軍はこのことを予期し約4百km西方にあった第20師団を急遽同地区に向かわせていた。10月半ば漸く現地に到着した20師団兵は補給の続かない中、食糧は4分の1定量と言つような悪条件下で血みどろの戦闘をした。しかし昭和19年1月半ばには苦難の転進のやむなきに至った。この転進もまた険険フニステル山系超えの苦しい転進であった。歩兵79連隊は3月中旬頃ハンサに漸く辿り着いたが、その兵力は3百名余に減っていた。敵は更に昭和19年4月以降、アイタペ、ホーランサと相次いで上陸した。第18軍は残存兵力をもってアイタペに上陸した敵に撃つべく努力を重ね、7月半ばから攻撃を開始した。

将兵は健闘し、一時、戦果拡張の期待される局面もあったが、結局、優勢な敵火力のため我が方の損害大きく我が糧食も尽きて攻撃を打ち切ることとなり、事後第18軍はウエワク地区西部の複陣地にて持久作戦に入り終戦を迎えた。(注、戦況経過は「大東亜戦争全史」を参考とした)

このように悲惨な戦いを続けた東部ニューギニアの戦役を担当した安連第18軍司令官は、終戦後ラバウルで職務整理を終えた後、昭和22年9月、自決された。自決に際し安連司令官は部下への思いを込めた切々とした遺書を残された。安連司令官の苦衷に満ちた遺書の一部を以下に紹介したい。

在コンパウンド  
 元第十八軍将兵諸君御中  
 私は今日を以て最愛の諸君とも別訣れることとした。  
 私は昭和十二年十月、月夜我戦争の陣地にて定むとする「大なる時機に於いて軍司令官の要職を拝し、皇軍戦勢の確保挽回の要請に當らしめられしことを、御に別見、期の面目にして有難く存じ奉りし次第である。然るに部下將兵が万難に克ちて異常なる奮闘に徹し、上司亦力を極めて支援を与えられたるに拘わらず、私の不敏の故を以て能く其目的を達するに到らず、皇国今日の境地に到る惨痛を作りしこと罪方死も猶足らずと存す

きて花吹雪の如く散り行く姿を眼前に眺めし時、君国の為とは申しながら我胸中に湧き返る切々の思いは唯神のみぞ知るべし、当時私は終戦凱旋に直面するも必ず十万人の将兵と共に南海の土となり、再び祖国の土を踏まざることに心を決したり

(中略)

さて諸君には作戦二カ年の間、実に非常な御苦勞をかけた而して皆立派にやってくされた。之に対する衷心感謝の思いは今以て胸に燃えて居る。然るに其諸君を今日の境地に立到らしめたことは何時も申すことながら何とも申訳けないことで茲に御決するに際し更に衷心より謝する次第である

(後略)

安連司令官の統帥のもと、華に尽くし難い過酷な条件下の東部ニューギニアで戦った将兵の善戦健闘に感謝し、司教場で設けられた方々の「冥福を遂げてお祈り申し上げる。

市遺族会では、毎年この時期に、戦没者墓免参拝を続けておられる。また1月24日(水)には、都内大田区遺族会の30名の方々が、冷たい風の吹く中、墓免参拝に訪れた。行は墓前にお花をお供えし静かに肉親の冥福をお祈りしていた。

このように、各地の遺族会の方々が、献祭の中を問わず、墓免参拝に訪れておられるが、肉親の「冥福をお祈りされる各地遺族会の方々の篤いお気持ちに、謹んで敬意を表する次第である。

かむながらのみち一行  
 戦没者墓苑に参拝  
 立春の日にあたる2月4日午後、神奈川県のかむながらのみち一行約百名が戦没者墓苑参拝に訪れた。

立春を迎えたと言え、当日は風の冷たい日であった。一行は、持参の供物を墓前にお供えし、花を献じて、山本部長を先頭に、冷たい風の中で、揃ってお祈りの祝詞を捧げ、心から戦没者のご冥福をお祈りしていた。中には父親、母親に連れられた幼い子供さんも見受けられ、この子供さんと一緒に真剣にお祈りする姿には心打たれるものを覚えた。

同教団では、毎年このような参拝を続けておられるが、特に同教団が千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉養会として、戦没者の慰霊奉養に心を傾けて下さることは誠に感謝に堪えないところである。

敵軍の中  
 各地の遺族会が正月参拝 比較的穏やかな日の続いた今年の1月も、小寒を過ぎると急に寒くなったが、この敵軍の続々、各地の遺族会の戦没者墓免参拝が行われた。

1月21日(日)には、伊勢原市遺族会の約10名の方々が揃って参拝された。この日は、前夜に関東地方に雪が降り、東京地区にも約5cmの雪が積もっていた。その悪天候の中、皆さんは足元を気にしながら参拝されていた。伊勢原

伊勢原市遺族会の参拝  
 立春を迎えたと言え、当日は風の冷たい日であった。一行は、持参の供物を墓前にお供えし、花を献じて、山本部長を先頭に、冷たい風の中で、揃ってお祈りの祝詞を捧げ、心から戦没者のご冥福をお祈りしていた。中には父親、母親に連れられた幼い子供さんも見受けられ、この子供さんと一緒に真剣にお祈りする姿には心打たれるものを覚えた。

同教団では、毎年このような参拝を続けておられるが、特に同教団が千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉養会として、戦没者の慰霊奉養に心を傾けて下さることは誠に感謝に堪えないところである。

かむながらのみち一行の参拝



しかし、行進を終え、千鳥ヶ淵の墓苑に足を踏み入れますと、墓苑の厳かな雰囲気にも包まれて皆の表情から疲労感が消えていきました。制服に着替へ、服装を整えて整列したのち墓苑奉仕会担当の方から墓苑の歴史等の説明をしていただき、戦没者の方々の墓前に黙禱を捧げました。皆が戦没者の方々のご冥福を祈ると共に、行進の行進に思いを馳せました。今回の行進と千鳥ヶ淵戦没者墓苑参拝が、学生にとって、日本の歴史と真の平和の意義を考へる良い機会になったと考えます。



学生 鈴木秀平  
「東京行進」とは、毎年十二月

横須賀市水水にありま防衛大学から千鳥ヶ淵戦没者墓苑までを一昼かけて歩くというもので、昭和三十一年に始まる防衛大学の伝統行事です。本校では、現在に至るまで企画や実施をすべて学生の手で行っています。その全行程は約七十里に及び、到着までは休憩を二つ約二十時間を要するほどで、初に皇居のお隣の周りを歩く頃にはこの学生が夜通し歩いた疲労の色をさえない様子でした。

「激動の時代」でありました。日本は、開国以来近代国家としての地位を築くべく断絶の努力を続け、太平洋戦争と敗戦を経験しつとも、戦後「奇跡の復興」を成し遂げ、経済大国として国際社会の重要な位置を占める国家となるに至りました。



墓前参拝に向う防大生

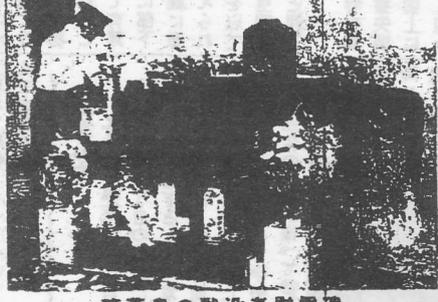
私には、この「激動の時代」を振り返るとき「歴史の連続性」を感じずには

悲しみが覆う鳥  
日本青年道骨収集団  
第一〇〇次硫黄島前期派遣隊  
隊長 辻村 崇

私には、この「激動の時代」を振り返るとき「歴史の連続性」を感じずには

硫黄島の史実を概ね理解してしまし知っていたからこそ、参加させて頂きたいと強く思い、その機会にも恵まれました。

12月5日結団式を行った天山硫黄島戦没者の碑前で、前期隊の報告式が未だ眠る1万2千柱の英霊の前に行われ、隊長が前期隊の成果を報告し、各自、線香や持ち寄った物などで供養した。



硫黄島の戦没者慰霊碑

12月6日、我々前期隊は後期隊にその任務を譲り硫黄島を後にした。

12月6日、我々前期隊は後期隊にその任務を譲り硫黄島を後にした。

- 会費納入のお願  
本月は、会費納入が4月に該当する会員の皆さんに、郵便振込用紙を同封致しました。何分宜しくお願致します。  
御千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
- 会費納入のお願  
御千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
- （注）此の記事は、政府派遣の硫黄島道骨収集団に参加した、辻村崇氏のレポートを、本青年道骨収集団を通じて掲載させて頂いたものである。
- （注）此の記事は、政府派遣の硫黄島道骨収集団に参加した、辻村崇氏のレポートを、本青年道骨収集団を通じて掲載させて頂いたものである。